

二〇一八年二月一四日

活断層深く宿して山眠る
堆く落葉なだるるなぞへかな
メモ書を消してまた足す年用意
鴨の引く水脈の三角川幅に
夫の背に祈る年末賞与の朝

二〇一八年二月一三日

白息の長さを競ふ登校子
星のごと煌めく霜や朝の畑
冴返る夕空高く匕首の月
杉美林ちらほら点る実南天
初氷柄杓で叩く手水鉢

二〇一八年二月二日

二三行息災問うて年賀状
診察券ポインセチアの横に出す
境内に広がる落葉煙かな

二〇一八年二月一日

音もなく庭石濡らす夕時雨
老い二人小さき聖樹に星飾る
目つぶれば故郷の山河日向ぼこ
椎の樹に一句碑の添ふ庵小春

宏 虎

ぽんこ

三 刀

明日香

なつき

智恵子

そうけい

はく子

やよい

愛 正

満 天

うつぎ

明日香

菜 々

たか子

うつぎ

せいじ

二〇一八年二月一〇日

百五十段を一気や息白し
畳蹴る否やに気合寒稽古
雀どち遊ぶ小春の精米所
菊畑の香にそふ畦をたもとほり
渋滞は覚悟の上や町師走

二〇一八年二月九日

せせらぎの小石に渋滞する木の葉
風花へ散歩の夫を見送りぬ
二〇一八年二月八日
梟の声近くして露天の湯
やはらかな峡の日差しに子守柿

せいじ

たか子

小 袖

そうけい

なつき

ぽんこ

よう子

智恵子

菜 々

毎日句会みのる選・二〇一八年二月一六日